

第4章 各種談話と韻律的諸特徴

第1章では「話調」を「ある談話場面における話者の何らかの意図・情緒の表現に関わる、談話全体に現れる韻律的諸特徴の合成としての音調」と定義した。そして「話調」形成に句末イントネーションが重要な役割を果たすことを指摘し、第2章ではその具体例としていわゆる「尻上がり」イントネーション、「昇降調」について考察した。第3章では句末イントネーションを6類型し、各談話における各型の出現率を明らかにし、その分布状況が異なることを確認した。

しかし、「話調」は句末イントネーション型の分布によってのみ決まるものではなく、またイントネーション自体も韻律という枠組みにおいてポーズ、ピッチレンジなどの韻律的諸要素と密接に関連していることは明白である。そこで本章ではイントネーション以外の韻律的諸要素にも着目し、各談話の韻律的諸特徴を個別に検討した上で、「話調」を総合的に明らかにしていく。

はじめに4-1では、談話自体の特徴を主に場面論、コミュニケーション論の視座から捉えなおし、各談話に内在する言語外的諸特徴について整理する。これは本研究資料の場面論、コミュニケーション論上の位置付けを確認するためである。次いで4-2では「話調」形成に関係すると考えられるポーズ、発話速度、ピッチレンジなどの韻律的諸要素を談話ごとに詳細に検討し、4-3では各対話模式図を通して、本資料中の朗読以外の談話資料における言い淀み、フィラー、対話者の相づちについても観察する。これらは句末イントネーションとも密接に関わっているからである。最後に4-4では、本研究で扱った12種6談話の音声資料が筆者以外の一般人が聞いても同様に分類されることを、聴取実験を通じて確認した上で、因子分析により韻律的諸特徴と談話の関係を総合的に探る。

以上の作業を通じて各種談話に特有の韻律の傾向を見出し、具体的存在としての「話調」の姿を浮き彫りにする。

4-1. 談話のコミュニケーション論上の諸特徴

ここでは、本研究で扱った談話について主にコミュニケーション論的視座からの整理を通して、その特徴について考察する。はじめに談話とそれを規定するコンテキストあるいは状況や場面との関係を、さらにそれらの談話がコミュニケーション論や場面論で一般的にどのように扱われ分類されているのかを概観する。そしてこれらの分類を参照しつつ、本研究の12人6種の談話資料について、話者の社会的属性、聞き手との関係、聞き手の社会的属性、メッセー

ジの内容、メディアなどの点から相互に比較する。

4-1-1. 談話とそのコンテキストの関係

ある言葉が発せられるとき、それが話し言葉であれ、書き言葉であれ、当然何らかのコンテキストあるいは状況や場面が存在する。その逆にある言葉が発することで、コンテキストや場面が規定されるという側面もあるが、いずれにせよ、談話とその談話が生まれた場面には密接な関係がある。場面を見ればそこでの談話がどのようなものかある程度予測できるし、逆に談話を見れば、それがどのような場面での談話なの予測できることは、その関係性の存在証明であると言えるだろう。日記なら「〇月×日 曇り。」のように書き始められることや、逆に「新郎××君は、」と聞こえれば結婚式のスピーチらしいということは、たいていの母語話者にはすぐわかる。本研究では、談話がそのコンテキストに応じて生まれ、一方コンテキストは談話により構成されるという相互関係を所与のものとして議論を進めてきた。しかし、なぜこれがそうだとわかるのか、「文字」や「音声」の塊が、どうしてある特定の文脈や背景を呼び起こせるのか、については厳密な言語学的な分析が必要になるだろう。どのように言語テキストがコンテキストと関連しているのか、についての具体的記述は本研究の範囲を超えるので、ここではハリデー(1991)の分析枠組を紹介するにとどめる。

ハリデー(1991)によれば、「状況のコンテキスト」(ほぼ本研究の「場面」という言葉に当たると考えられる。)を記述する概念的枠組として、①「談話のフィールド(言語活動領域)」(field of discourse)、②「談話のテナー(役割関係)」(tenor of discourse)、③「談話のモード(伝達様式)」(mode of discourse)の3つが挙げられるという。また一方、「言語の機能を言語の意味体系の機能的部門と定義」すると、(a)論理的と経験的とに下位区分される観念構成部門、(b)対人関係部門、(c)テキスト形成部門の3つの部門に分けられるという。そして、①は(a)の中の経験的意味に、②は(b)対人関係的意味に、③は(c)テキスト形成的意味に反映されるという。要するに「状況の範疇」(コンテキストや場面の類型)と、「意味体系の範疇」(テキスト・談話の意味内容)の間には相関関係があることを指摘している(注1)。

さらに重要な点は、「言語使用域」(register)という概念であろう。これは、ハリデー(1991,p.62)によれば「一般理論との関連において、状況の変化に対応する言語の変化という概念が必要となる。」ことから導入された意味論的概念であり、「フィールド、テナー、モードが示す状況的形相(configuration)と典型的に結びついた、意味の形状であると定義することができる。」ものだという。しかし、「register」という言葉自体はHalliday(1964)にすでに導入され、邦訳語とし

てハリデー(1977)では「使用相」が使われているが、そこでは前述のフィールド、テナー、モード(ハリデー1964ではスタイル style)が、registerの分類方法として提示されている。また、ハドソン(1988, p.74)によれば、「レジスターRegisterという用語は、社会言語学において、「使用者」に基づく変種」と定義される方言に対して、「使い方に基づく変種」に言及するのに広く用いられている。」という。

ハリデー(1991)のように、言語の機能面と場面の関係を重視する分析では、上記の3分類でも有効かもしれないが、レジスターの違いを考える上での広く用いられているモデルとして、ハドソン(1988, p.76)は、「「方言」という変項とは別に少なくとも十三以上の異なる変項が、話者の選ぶ言語項目を決定する」というデル・ハイムズ(Dell Hymes 1972)のモデルを挙げている。しかし、「この数字さえもレジスターによる違いの複雑さを表しきれぬかどうかは、非常に疑わしい。」と指摘している。無数に存在するレジスターや、言語の違いをもたらす場面の違いの分類を行うことはそれほど容易ではないということだ。困難さを踏まえた上で、以下では他の視点、主に場面論、コミュニケーション論上からの場面の分類方法を概観する。

4-1-2. 談話のコミュニケーション論上の分類

コミュニケーションの道具として言葉を見る場合、言葉自体はそれを取り巻く何らかの状況、場面において扱われることが一般的である。南(1979)によれば「日本で言語行動についてのまとまった一般的理論としてわりに早い時期に示されたのは時枝誠記の考え方である。」という。時枝(1941, 1955)は言葉を表現と理解の過程として捉える言語過程説を唱えたことで知られるが、「言葉の存在条件」として「主体」、「場面」、「素材」という3要素を挙げた。時枝(1941, p.41)によれば、「主體は言語に於ける話手であつて、言語的表現行為の行為者」である。そして「場面は場所を充たす處の内容をも含めるもの」として、「聴手をも含めて、その周囲の一切の主體の志向的對象となるものを含むもの」とした。さらに「素材は言語によつて理解せられる表象、概念、事物」であり、それらは主体によって「就いて語られる(もと傍白点、*筆者注)素材であるという。「素材」を言語の「存在条件」と考える素材観は、音声に対応する意義や意味として言語の構成要素、言語の内部的要素と考える構造主義言語学の考えとは相違するが、「言語過程説の必然の結論」でもあるという(時枝 1941, p.50)。また「ついて語られる」もの(素材)と、話し手・聞き手を含めた場面とを同列に言語の存在条件として挙げ、これらを重視した点、つまり「言語外的要素」をも言語の存在条件とする立場は、当時において非常に特異な立場だっただろう。

しかしその後、社会言語学的視座からは、言葉を取り巻く「状況」や「場面」がより重視される

ようになり、それらを構成する要素について、多くの指摘が見られるようになった(國廣 1977、柴田 1977b、ネウストプニー1979、林 1979、Hymes1962、1972、1974、Jakobson1960 など)。それらの名称は様々であるが、1、送り手(情報の発信者)、2、受け手(情報の受信者)・媒介物・送り手と受け手の社会的関係・場所や場面、3、話題・内容などであり、それぞれ時枝の「主体」、「場面」、「素材」に該当する。これらなしにはコミュニケーションは成立しないことは言うまでもない。時枝(1941、p.41)が、「三者は相互に堅き聯繫を保つて、この中に言語表現を成立せしめてゐる。この様な支柱なくしては言語は成立し得ないと同時に、この三者の相互関係が言語自體を種々に變形させる處の力を持つてゐるのである。」と指摘した通りであろう。

江川(1994)によれば、「場面をめぐる議論(場面論)は、時枝誠記の「言語過程説」に触発された形で、戦後間もなく興った言語生活研究の動きと連動した中で、1940年代の終りから60年代初めにかけて盛んに論じられ」ており、実態調査を中心とする多くの言語生活研究においても場面の重要性は意識され、様々の調査が行なわれてきたという。しかし場面論で志向された一般的・体系的モデルを調査の場で実現することの難しさから、これらの研究にはほとんど反映されることがなかったと指摘している。畠(1983)は場面論の理論化が進んでいない理由として、「場面の記述が教室場面とか患者・医者場面とか言うように、場面の構成要素の一つに注目し、それを強調することによって場面の全体的特徴を代表させるという恣意的な段階にとどまっています。場面のカテゴリーカルな特徴を体系的に分析する概念が欠如している」と述べている。それでも江川(1994)によれば、「1980年代初以降、言語行動研究および日本語教育研究の関心の高まりに伴って、「場面」が改めて問題となってきている。」という。確かに日本語教育研究では、「談話」の流れや「場面」ごとのコミュニケーションのあり方を探ろうという方向性が伺えるが、やはり、畠(1983)の指摘するような特定場面(電話での会話、依頼や断りなど)に限っての研究にとどまり、これらを「場面論」として総括するような研究がなされているとは言えない。

何らかの理論的な枠組が必要であることは否定しない。しかし「場面論」においては実際の具体的現実を見ることに重点が置かれている点を顧慮すれば、本来、具体的な存在を抽象的、理論的に類型化するという作業自体に拘泥しても、あまり意味がないことも確かだろう。

一方、コミュニケーション論においては、コミュニケーションの場である広い意味での「場面」を、主に対話参加者の人数、つまりコミュニケーションの規模をもとに分類し、一般に「個人内」、「対人」、「異文化」などのレベルを設定している。しかし、これらレベルの設定は研究者ごとに異なる。例えば岡部(1987)のように、個人レベルの下位分類として「個人内」、「対人」レベルを設定し、社会レベルの下位分類として、「集団」、「組織」、「国家」、「文化」の各レベルを設定した上で、それぞれを「間」と「内」とに分け、全部で10分類を施すものもあれば、ジャー

ゲン ロイシュ他(1989)のように「個人内」、「対人」、「集団」、「文化」の4分類しか設定しないものもある。各レベルの境界自体相対的なものであり、また、各レベルのコミュニケーションの性質も、その相対的な差異に着目したものであることは言うまでもない。

日本語の言語面からコミュニケーション・レベルを考えると、「個人内」、「対人・小グループ」、「パブリック・マス」の3分類が妥当ではないかと考えられる。マクロのレベルで情報がどのように流れるかに着目すれば、岡部のような規模別、グループの性質別分類は確かに有効だと考えられる。しかしそのような情報の流れをマイクロレベルで観察すると、結局は誰かが発信した情報を誰かが何らかの方法で受信するということの積み重ねにすぎない。つまり、極論すればレベルに関係なく誰が誰に何をどう伝えるかということが問題になる。そして、本研究は言語面に焦点を当てるため、その情報のやりとりの際に、どのような言葉が使われるかがもっとも大きな関心事となる。本研究の談話資料には、小説・童話の朗読の一部に本来は独り言や個人内対話と考えられる「個人内」レベルの発話ごく少数含まれてはいるが、やはり「対人・小グループ」と「パブリック・マス」の両者の境界は厳密ではないにしても、韻律も含めた言語形式の分類を考える上でも一つの重要な軸になると考えられる。

さらに日本語社会の多様性を考えれば、方言と共通語の使い分けや、常体と敬体の使い分け、敬語の使用、不使用、フォリナートークなど、話し手と聞き手の文化的背景も含めた社会的関係やメディアなど、様々な軸ごとに際立った差異が見られる。レジスターの違いは4-1-1でも言及したとおり、非常に多彩である。コミュニケーションの規模に基づく「コミュニケーション・レベル」だけで単純に割り切ることのできない問題もある。実際は規模によってのみ「パブリック・マス」対「対人・小グループ」などと単純な二元論で割りきれものではないことは言うまでもない。しかし「パブリック・マス」レベルをコミュニケーションの規模にだけ注目するのではなく、それに伴って派生する公共性、「よそいき」性や明晰性などの諸特性と、「対人・小グループ」のもつ諸特性（「個別性」、「内輪性」、「冗長性」など）とを対置させることは可能だと考える。

各種の方言調査(石野他 1992、井上 1989、1992b)における場面による言葉の使い分けについて見ると、方言使用の極端に少ない場面を「パブリック・マス」レベル的と捉え、方言使用が許容される場面を「対人・小グループ」レベル的と捉えることも可能であろう。井上(1992)の方言調査からは、多少の地域差は見られるものの、書き言葉、テレビスタジオや校長室で話す言葉、普段家の中や町内の集まりで話す言葉の3段階で共通語の使用率が段階的に高まっていることが確認できる。テレビスタジオ・校長室での話し言葉における共通語使用度は普段家の中や町内の集まりでの言葉よりも、さらに書き言葉に近い。このような傾向は石野他(1992)の調査からも伺える。石野他(1992)によると「NHK アナウンサーのインタビューに答えるとしたら」という

問に対する答えでは「標準語を多く使う」や「標準語だけ」がそれぞれ 40%以上であり、「方言だけ」(2.7%)、「方言を多く使う」(11.5%)を大きく引き離している。これらの調査からも、「標準語」が期待される「パブリック・マス」レベルと、そうでない(つまり方言が許容される)「対人・小グループ」レベルという二つのレベルを設定することには、それほど抵抗がないものと言えるだろう。

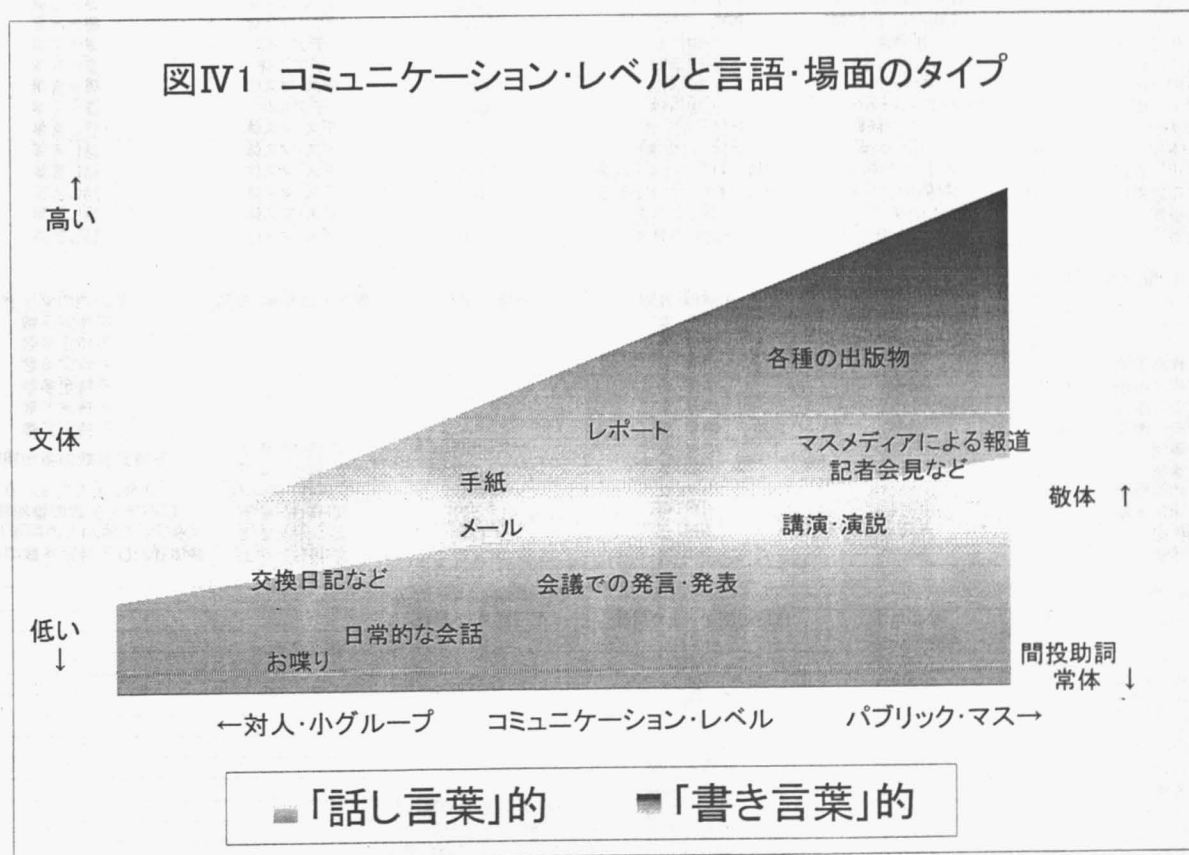
また、荻野(1983)は待遇表現の数量化を行ったが、待遇レベルはおおむね 2 段階になっており、この待遇レベルの高低が「デス・マス」体の使用不使用の決定に関わっていることは明らかである。荻野(1983)では、「初対面の人」、「年上の親しい人」、「年下のあまり親しくない人」、「配偶者」など聞き手の属性別に「知っているか」をどのように言うか質問し、その語形の丁寧さによって点数を与え、その語形の出現頻度をもとに各聞き手の待遇レベルを算出し、積み木状の 3 次元グラフで対話者ごとの待遇レベルを示した。これによれば、それぞれに若干の差はあるものの、年齢に関係なく初対面の人やあまり親しくない人、年上の親しい人についての待遇レベルが全体的に高く、全体的に低い待遇レベルに属する親しい同年及び年下の人、家族との差が大きくなっており、概して上下二段階に分かれていると言える。

「よそいき」性の現れとして「デス・マス」体を捉え、「パブリック・マス」レベルの一つの典型と考えれば、これに対置するものとして「デス・マス」体が使われない「対人・小グループ」レベルを考えるのも無理なことではないだろう。このことは「デス・マス」体が「対人・小グループ」レベルでは使われない、「パブリック・マス」レベルでは必ず使われる、ということの意味するのではない。ただし「デス・マス」の使用が単なる規模によるものでないことは、ここで多言を弄する必要はないだろう。ここでは現実にあり得る様々な例をごく単純化して、コミュニケーションの規模をもとに分類された抽象的な「パブリック・マス」レベルというレベルの特徴の一つとして、単に規模だけで割り切れない言語上の特徴を指摘したにすぎない。つまり、規模の大きさという特性から招来される「よそいき」性を代表するものとして、話し言葉における「標準語」や「敬語」や「デス・マス」体の使用が位置付けられ、規模が小さく「よそいき」性がより低い「対人・小グループ」レベルにおける「方言」、「常体」の使用や敬語の不使用がその対極に位置するものと単純化して考えたのである。現実には「対人・小グループ」レベルにも「よそいき」の言葉が使われ、「パブリック・マス」レベルであってもくだけた物言いというはいくらでもあり得る。

さらに「パブリック・マス」レベルと「対人・小グループ」レベルはある意味でそれぞれ「書き言葉」と「話し言葉」に対応しているとも考えられる。話し言葉の語彙・文法上の特徴として芳賀(1988, p.679)は、①一つ一つの文が比較的短い、②文の成分の順序が正常でない場合がある、③同じ文や語を繰り返すことが多い、④言いさしの文で終わることが多い、⑤動詞の連用形で文

を中止することはほとんどない、⑥補充法を用いることが多い、⑦修飾語を用いることが比較的少ない、⑧文の成分の一部を省略することが多い、⑨指示語を用いることが多い、⑩敬語がよく用いられる、⑪終助詞が好んで用いられる、⑫間投詞・間投助詞が好んで用いられる、⑬漢語の用いられることが少ない、⑭文語的漢文的翻訳的な要素は少ない、の14点を指摘した。「対人・小グループ」に「話し言葉」的なるものが対応するというのは、「話し言葉」のこのような特徴にもとづく。しかし討論での発言や質問に答える談話などは、「話し言葉」ではあるが、より「書き言葉」に近い。また書かれたものを朗読するのではなくても、講義などは十分「書き言葉」的である。「話し言葉」内部にも様々な段階があり、あくまでもその違いは相対的なものである(注2)。つまり「パブリック・マス」レベルが即「書き言葉」であることを意味するわけではない。「パブリック・マス」レベルでは「話し言葉」にない「書き言葉」的特徴が「対人・小グループ」より強く現れているということである。またイントネーションなどの韻律的特徴の現れ方に関しても、前者においては整然とした均整のとれた状態であるのに対して、後者においてはより雑然とした、バリエーションに富んだ様相を呈していることは誰にも経験から容易に予想できるだろう。

以上の議論を踏まえ、コミュニケーション・レベルと言語のタイプ、場面、文体の高さについて、ごく簡略化してまとめると図IV1のようになるだろう。



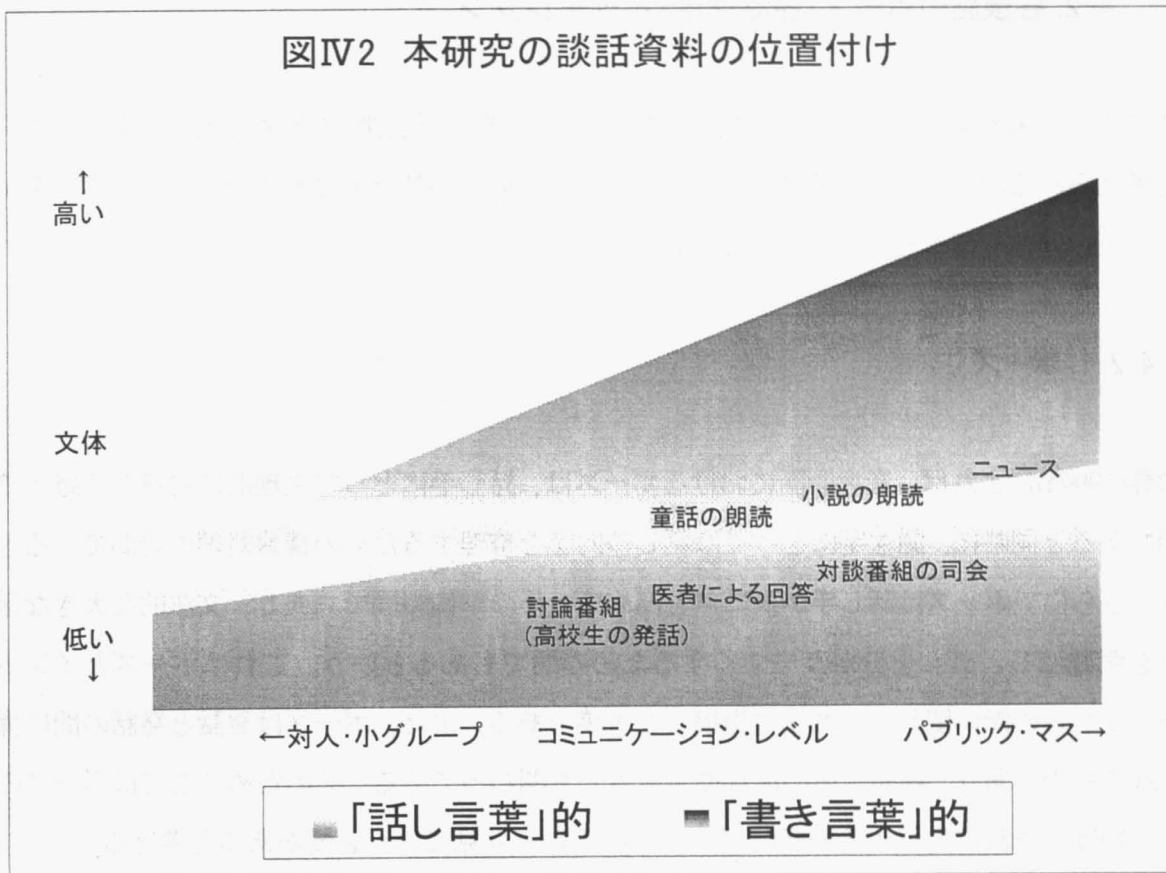
4-1-3. 本研究談話資料のコミュニケーション論上の位置付け

ここでは本研究で扱った 12 人 6 種の談話資料について、相互比較のために話者の社会的属性、聞き手との関係、聞き手の社会的属性、メッセージの内容、メディアなどについて見ていく。そして各談話のコミュニケーション論上の位置付けを明確にする。

表IV1 からわかるようにニュースや小説の朗読は、話者がアナウンサーや俳優など、「話すこと」の専門家で、不特定多数の聞き手を想定して「書かれたもの」を発話している。話者の眼前に聞き手がないことも特徴である。これに対して育児相談の回答者や討論番組の発言者はテレビ出演ということで、ある程度改まった場面での発話を意識している(はずだ)が、話者は話し方や発声について専門の訓練を受けているわけではない。直接の聞き手は主に司会者(NHKアナウンサー)だが、顔の見える範囲に複数の聞き手もいる。書かれたものを読み上げるわけではない。「今日の健康」と「すこやか介護」の司会者は NHK のアナウンサーで、「話すこと」の専門家であるが、聞き手は対面する一人の医師であり、ある程度原稿はあるかもしれないが、

内容・メディアに関して		題名・話題	情報内容	メディア	文(話)体	書き言葉/話し言葉の別
ジャンル	記号					
ニュース	fnew	浦和市の合併問題	報道、アナウンス	テレビ	デス・マス体	書き言葉
ニュース	mnew	浦和市の合併問題	報道、アナウンス	テレビ	デス・マス体	書き言葉
文芸作品朗読	fshi	「新聞紙」	表現活動	CD	デアル体	書き言葉
文芸作品朗読	maka	「赤ん坊と半鐘」	表現活動	CD	デアル体	書き言葉
児童向け朗読	fura	「浦島太郎」	表現活動	CD	デス・マス体	書き言葉
児童向け朗読	mnez	「町のねずみと田舎のねずみ」	表現活動	CD	デアル体	書き言葉
対談番組	fkai	リハビリ体験	対談: 司会進行	テレビ	デス・マス体	話し言葉
対談番組	mken	子供の発達	対談: 司会進行	テレビ	デス・マス体	話し言葉
育児相談番組	fish	新生児の扱い	対談: 質問に対する回答	テレビ	デス・マス体	話し言葉
育児相談番組	mish	妊娠中の注意	対談: 質問に対する回答	テレビ	デス・マス体	話し言葉
討論番組	fdit	食生活とダイエット	討論での発言	テレビ	デス・マス体	話し言葉
討論番組	mkom	米ざらいと食生活	討論での発言	テレビ	デス・マス体	話し言葉
話し手・聞き手に関して		話者の社会的属性	年齢層・性別	直接の聞き手	聞き手の年齢・性別	その他の聞き手
ジャンル	記号					
ニュース	fnew	NHKアナウンサー	中年・女			不特定多数
ニュース	mnew	NHKアナウンサー	中年・男			不特定多数
文芸作品朗読	fshi	俳優	中年・女			不特定多数
文芸作品朗読	maka	俳優	中年・男			不特定多数
児童向け朗読	fura	NHKアナウンサー	中年・女			不特定多数
児童向け朗読	mnez	俳優	中年・男			不特定多数
対談番組	fkai	NHKアナウンサー	中年・男	ゲストの医師	男(異性)・年下	不特定多数の番組視聴者
対談番組	mken	NHKアナウンサー	中年・男	ゲストの医師	女(異性)・年下	不特定多数の番組視聴者
育児相談番組	fish	小児科医	中年・女	司会者	女(同性)・同年代	スタジオの7、8人の一般人及び不特定多数の番組視聴者
育児相談番組	mish	小児科医	中年・男	司会者	女(異性)・年下	スタジオの約20人の同年代の討論参加者及び不特定多数の番組視聴者
討論番組	fdit	高校生	若年・女	司会者	女(同性)・年上	
討論番組	mkom	高校生	若年・男	司会者	女(異性)・年上	
場面に関して		発話場所	直接の聞き手との距離	その他の聞き手の位置 (不特定多数は除く)		
ジャンル	記号					
ニュース	fnew	スタジオ	なし			
ニュース	mnew	スタジオ	なし			
文芸作品朗読	fshi	スタジオ	なし			
文芸作品朗読	maka	スタジオ	なし			
児童向け朗読	fura	スタジオ	なし			
児童向け朗読	mnez	スタジオ	なし			
対談番組	fkai	スタジオ	司会者の隣			
対談番組	mken	スタジオ	司会者の隣			
育児相談番組	fish	スタジオ	司会者の隣	スタジオ内のやや離れた顔の見えるところ		
育児相談番組	mish	スタジオ	司会者の隣			
討論番組	fdit	スタジオ	教室での教師・生徒間程度	司会者を中心に顔が見える範囲に半円状に並ぶ		
討論番組	mkom	スタジオ	教室での教師・生徒間程度			

図IV2 本研究の談話資料の位置付け



より話し言葉的で、朗読と対談の中間的なタイプと言えるだろう。これらを先の図IV1 に位置付けると以下の図IV2 のようになるだろう。

図IV2 を見ると本研究で扱った音声談話は比較的文体が高く、つまり改まった場面での談話が多く、やや「パブリック・マス」レベル側に偏っていることがわかる。また音声言語といっても朗読などはほとんど「書き言葉」である。親しい友人同士で交わされる「お喋り」や「井戸端会議」的な談話は、雑音が入り音響分析が難しく、逆に録音室などでの収録では、緊張して自由な談話が取れないという問題があり、本研究ではこれらの談話を扱うことができなかった。よりくだけた場面での談話についての分析は別の機会に譲る。

このように本研究の資料にはやや偏りがあり、相互に近似したタイプの談話が多かったものの、以下に述べるように、朗読とそれ以外の談話に非常に大きな差が見られるだけでなく、各談話場面による違いも見られた。第3章の最後に談話ごとのイントネーション型の分布の相違が談話タイプの違いと関連する可能性があることを確認した。次の4-2 では、句末イントネーション以外の韻律要素として、談話タイプ別にポーズ、発話速度、ピッチレンジについて、詳細に見ていく。